



修猷館ラグビーOBクラブ

会報 平成22年3月号

修猷館ラグビー部 公式ホームページ
URL <http://shuyukan-rugby.com/>

中島利昭 修猷館館長

◇ 玄南の海～血潮は躍る春の空～

中島 利昭(修猷館 館長)

新年早々に東福岡高校ラグビー部が、圧倒的な強さでの全国制覇を見せつけた。個々の強さと、15人の集団としての組織力どれをとっても全国一のチームだった。

正月二日のワールドユース大会予選から本校新チームの戦いは始まった。全国レベルのチームとまさに悪戦苦闘の四日間であった。

一 修猷健児今立ちぬ 1月17日 新人戦県大会三回戦

新人戦は、幸いなことに昨秋三年生が勝ち取ったベスト四の高い位置からのスタートである。

筑紫の天然芝グラウンド、天候は快晴、空の青さに映えるはずの芝の緑が全く見えず、選手の周りでは砂埃が上がる状況であった。(修猷45-7筑前)

二 颯爽の勇姿翻る 1月24日 同準々決勝 東福岡グラウンド

ラグビー部OB会を中心に本校ラグビー場の人工芝化が検討されていたこともあり、昨秋、徳野東福岡学園理事長(S46年修猷卒)にお願いして完成なったラグビー場(人工芝)を見学させていただいた。当時、サッカー場は工事中だったが、ラグビー場は驚くばかりの充実振り。今後は「槍」でも降らない限り快適な試合が出来るようである。見学後、工事を担当した業者から人工芝ならではの課題も聞いた。その後、ラグビー部OBの紹介で業者に図面を引いてもらい試算をしてもらった。(別紙図面)

現在の状況は、

①県の施設課が「過去に運動場工事の記録がある。」と言っていたその「工事」がラグビー場横、旧二休周りの側溝、表土の入れ替えのみの工事であることが判明したこと。もしかすると、明治三十三年に大名町から西新町に移転してきてから排水を含めた大規模な改修工事は一回もされていない運動場かもしれない。「運動場改修工事をやる！」という口約束はとれている。

②人工芝には落ち葉、土、海水は厳禁！

東福岡のグラウンド周囲の樹木は全て伐採され、土の部分は全て舗装されていた。そのため本校の場合も、ラグビー場だけでなく全面に人工芝を張る必要があるが、修猷の歴史を物語る樹木と共存する道をどう図るか。また、真夏に地



新人戦準決勝 (写真協力 杉田写真館)

上熱の発散のため水撒きが欠かせないが、海水(深く掘れば海水が出る)は不可とある。福大のサッカー場のように地下をプールにして排水対策と、撒水の問題解決を一挙に図る方向での検討が必要である。

③全面人工芝を張るとなると基礎工事を除いて約二億円

事後の補修に関しては、教室のエアコンや、講堂の可動椅子と同じように生徒の月々の積み立てで賄えそうであるが、初期投資としては額が大きすぎる。(昨年暮れ、一年の「運」を賭けて勝負に出たが、見事に大はずれ、三百円券さえはずしてしまった。ある人曰く「つまるところで館長の「運」を使わないで良かったですね!」と。私は「秘かに二億円当たったら人工芝!」と思っていたのですがね。」と言ったものの神様は私の心の中をお見通しのように恥ずかしい限り。) 澄み渡った青空に人工芝の緑が映える。修猷のケンブリッジブルーの段柄ジャージが縦横に駆け回った。渾身の力を込めてぶつかってきた筑紫丘を21-3で押さえ込む。

三 興望は重し丈夫や 1月31日 同準決勝 グローバルアリーナ

この数日前から風邪具合が悪く、外は雨模様、風は冷たく「こんな天気に行くの?!」と、いつものように呆れ顔の女房殿。「俺は傘を差して観ているだけだが選手は傘もさせんたい。」「これが男の生きる道・・・」風邪をひいている割に食欲はある。試合開始は12:15、行く途中の高速道SAで昼食を摂った。「カツ丼」ム!今日の試合に「勝ドン」と一瞬思ったが食べたのは「親子丼」、試合開始後ず〜と相手陣地で戦うも奪った得点はペナルティーの3点だけ。アツという間に逆転され、後半は、試合巧者の筑紫らしくセットプレーを着実に決められ、終わってみれば修猷3-22筑紫、やっぱりカツ丼を食べてくれれば良かったと後悔しきり。

四 春風のごと進み行け

冷たい雨風の中、整然と応援を続けた応援団の姿を誇りたいと思うし、正月二日からワールドユース予選会から応援に駆けつけていただいた卒業生、保護者の皆様方にも深く感謝を申し上げます。そして相手チームとの戦いとともにより自らと戦い続けた選手諸君の健闘を讃え、今後の精進を共に誓いたい。



新人戦準決勝 (写真協力 杉田写真館)

◇「修猷館ラグビースピリット」の探求と再確認：その3（最終）
安部 直幸（S41卒 修猷館ラグビーOBクラブ会長）

「伝統そして伝統校」とは

今年で修猷館ラグビー部は大正14年（1925年）の創部以来、85周年を迎えます。

「伝統校における伝統ある運動部のひとつ」であることは、自他共に認めることです。伝統とは「永年に亘って集団において培われた習慣・制度・思想・文化や、その中心をなす精神的在り方」であり、伝統校とは「これらの伝統が現在に至るまで脈々と受け継がれ発展し続けている学校」のことでありましょう。

この節目の年を迎えるに際し、「伝統ある部」の過去と未来の狭間に身を置く者の責務として、数多の先達の熱い想いに報いるとともに、これからの後輩諸君に引継いでいくべくこれらの伝統を今日的に解釈し再確認する必要性を感じ、3回のシリーズとして拙稿を起した次第です。

前提としての「不易流行」

「修猷館ラグビースピリット」の継承に際しては「不易流行」の理に則り、「修猷館ラグビー部」のアイデンティティを護りながらも、頑迷固陋に陥ることなく、時代の流れに柔軟にかつ融通無碍に対応していくことが肝要と考えました。

※「不易流行（ふえきりゅうこう）」とは、永遠の本質は新しさを求めて常に変化する流行のなかにこそある、という蕉風俳諧の理念のひとつ。「不易」は永遠に変わらない、伝統や芸術の精神。「流行」は新しさを求めて時代とともに変化するもの。

「創部時の理念」は、

創部時のエピソードについては、故守田基定先生等を中心に編纂された「修猷館ラグビー部40年誌・同70年誌」や大先輩である故溝口 博元会長の自伝「ラグビーこそ我が人生」に綴られています。

それによると、九州に初めてラグビーフットボールが紹介されたのは大正11年（1922年）。伝道者は、当時東邦電力福岡支店（現、九州電力の前身）に赴任したばかりの横山通夫氏（後の中部電力会長・日本ラグビー協会会長）・伊丹三郎氏ら気鋭の慶応大学蹴球部（ラグビー部）OBの面々。

彼等は、大学時代に自分たちが魅せられたラグビーを地方にも伝播しようと、早速「九州ラグビー倶楽部」を創設するとともに地元福岡への「ラグビー布教」を開始しました。2年後の大正13年（1924年）には先ず、旧制福岡中学（現、福岡高校）の創部に漕ぎつけ、更に翌大正14年（1925年）に当時の修猷館中学白坂栄彦館長の説得に成功し、創部許可を交付しました。

ラグビー部発足後、横山氏は足繁く来館され、部員に対し熱心に実技指導されると共に「気品、気骨、矜持」の3つの要素をスポーツマンの求むべき資質として力説されておられたそうです。

※「気品」とは、どこことなく感じられる上品で気高い趣。乱暴な喧嘩や戦いなどではなく正々堂々フェアプレーを貫き、皆が全力を出し助け合いgame（遊び）をplay（楽しむ）する姿勢。対戦相手さえも、共にgameをplayする「大切な友」として敬意を払う心。

※「気骨」とは、自分の信念を貫いて、どんな障害にも屈しない強い意志。どんなに大きな敵であっても逃げない、恐くても痛くても「今」一歩前に踏み込む勇氣、強い相手も同じ人間であり決して諦めない勝つ気持ち。試合に出ていない仲間やチームのために、「今」俺がやらねばという、リーダーとしての意地。

※「矜持（きょうじ）」とは、自分の能力を優れたものとして誇る気持ち。単なるプライドというよりむしろ、スキルを獲得し、勇氣を身にまとい、不屈の闘志を心に醸成し、修猷館ラグビーとして「心・技・体」日々成長している自分への自信。ともに練習し成長し、助け合い、支えあって、強くなっていく仲間とチームへの信頼と誇り。

当時の修猷館中学で体育教官をなさっておられた長三熊先生が学内における創部手続きや部員募集の担当に任せられ、横山氏らと議論を重ねるとともに同氏が携えたラグビーに関する英語原書を悪戦苦闘しながら読み解き、「創部（兼、部員募集）趣意書」を書上げたそうです。

長先生はその趣意書の中でラグビー競技の特長として「（1）運動家精神、（2）個人的徳義、（3）協同一致精神」の啓発を掲げられました。

その今日的解釈は

残念ながらこれらについての解釈或いは説明が残っておりませんので、これを今日的に読み替えるならば「（1）スポーツマンシップ、（2）集団における規律（ルール）と自我の尊重、（3）チームプレイ（またはone for all, all for one）精神」の啓発」ということになるのでしょうか。

（若干意訳に過ぎた部分をご容赦いただき）いま見直してみても、80年以上の時の流れを経ても、いっこうに陳腐化していない我々が掲げるべき「普遍的精神（スピリット）」といえるのではないのでしょうか。スピリットを形成するこれら3つの要素は、更に次のように展開することが出来ます。

（1）スポーツマンシップ → 気品

① 対戦相手への敬意

② 「Good-Loser」（潔き敗者）としての態度

※「Good-Winner」（心優しき勝者）との表裏一体

（2）集団における規律と自我の尊重 → 気品+気骨

① ルールの尊重とレフェリー或いは指導者への敬意

② 「Followerの責務」の実践と自立心の養成

（3）チームプレイ（one for all, all for one）精神 → 気品+矜持

① 個人の栄誉よりチームの栄誉（Honor is equal）

仲間への信頼と仲間からの信頼に応えるための弛まざる努力

キーワードは「RESPECT」

「RESPECT」は通常、「尊敬する・尊重する」と解されることが多いですが、本義は「RE（ふり返って）-SPECT（見る）」で「人としての価値を認める」こと。試合や日々の練習を通じ、対戦相手もチーム仲間も技量・人格共に大きく成長していきます。その彼等と自分自身の成長を謙虚に「見つめ直していく」ことが自らの自立や自己実現につながっていくものです。

上記「スピリット」の3要素の中にも、「RESPECT」が随所に顔を見せます。

現役諸君の使命

「修猷館ラグビー部」の悠久の歴史の中で、いつの時代もその時々々の現役が担うべきは、下記の2つの使命です。

1. 先輩の実績を超えること、または超えるべく最大の努力を惜しまぬこと。
2. 自分たちの実績を超えることのできる後輩を育てること。

今も「ラグビー校」では

ラグビーフットボール発祥地である英国パブリックスクール「ラグビー校」（現在ではこちら男女共学）では「人格形成において不可欠」として今でもスポーツが教育の中心を占めており、とりわけラグビーやクリケットそれにホッケー等の集団競技は必修で、毎週火曜日の午後には全校での対抗戦が行われているそうです。

また同校の入学案内には、同校におけるスポーツ教育の目的は「信頼・自立心・自己実現」と明記してあるとのこと。

終わりに

3年間の高校生活は、その後の個人個人の人格形成においても最も重要な時期といえます。保護者のもとから巣立ち、責任ある一人の人間として社会に出る、自立目前の3年間。本当の意味で独り立ちし、社会に認められ自己責任を果たしつつ、自己実現を目指し人生を歩き始める、そのための準備期間に「知・徳・体」を育み自分自身を固める、最初の人間修行の道場。それが、修猷館高校ラグビー部での3年間だったように思えます。

大学受験や社会人としての一歩を踏み出す直前のかけがえのないこの時期に、日々の学業への負担に加えて、肉体的にも精神的にも多大な負荷が要求されるラグビー競技に取って挑戦してくれた現役諸君達には、その強いられる負荷よりもはるかに大きくそして貴重な成果が与えられるものと確信しています。

◇『スポーツの目的は…だがスポーツの意義は…』
武藤 英治 (S45卒 修猷館ラグビーOBクラブ副会長)

福岡の新春は東福岡高校の二度目の全国制覇で幕を開けた。福岡県代表としての堂々たるその闘いぶりは他を圧倒し、同じ土俵に上がる修猷館ラグビー部にかかわる一人であるが、その偉業に賞賛を惜しまない。昔日のラグビー王国福岡の復活と言えよう。表題の「スポーツの目的は勝利することである。」を立派に果たしたと言えよう。

他方、福岡の代表を決する昨年の筑紫高校の戦いぶりに敗れたとは言え、勝者に劣らぬ惜しみなき拍手を送ったのは私一人ではないと考える。春の九州大会、福岡県予選決勝で82-0の大差で敗れ去ったそのチームが半年後には、あわやと思わせる17対12のワントライ差に追い詰め、一昨年の2点差の敗北の時の選手諸君の表情と昨年のノーサイドのフィフティーンの表情に差異を見たように思う。大差の屈辱から僅差の好ゲームへ、そこに高校ラグビーの真髄と可能性の深さを見、その半年の成長に賛美を送らざるを得ない。

翻って、我が修猷館児。昨年は筑紫高校に敗れたとはいえ、準決勝進出も、またその戦いぶりも久々に一条の光を見出した思いであった。高い志を持ち修猷の門に入り、ラグビー部の扉を叩いた、現役諸君。胸に六光の星が輝くジャージを身にまとい、勇壮にゲームに臨む君たちを羨ましく思う。今一度、過去に戻ることが可能なら、今の君たちの年代へと望むと思う。

「スポーツの目的は勝利することである、だがスポーツの意義は勝敗を越えた所にある。」東福岡は見事に目的を果たした。筑紫は勝敗を越えた意義を見出した。

君たちのこの一年が高い矜持と深い自省のもと、目的へ意義へと邁進する日々であることを祈る。

最後にOB会諸兄の弥栄と修猷館の更なる輝きを祈念し、拙文を終えます。

◇私とラグビーと修猷館と

原 大基 (S62卒)

【はじめに】

S62年卒業の原大基です。親父(原廣司S27)の影響で、小学校の時分よりラグビーを始め、以来高校、大学、社会人(クラブチーム)と続け、現在は息子の所属するラグビースクールにて小学生相手にラグビーを教えています。私にとってラグビーは単なるスポーツという枠には収まりきれないもので、水や酸素と同じ様に、人生を歩む上でなくてはならないものです。

【修猷館時代】

修猷館のころは、土埃舞い上がるグラウンドで花園を目指す毎日を送りました。あの頃の顧問は淵本先生でしたが、秋吉先(S26)や故・結城先輩(S30)など多くのOBの方にグラウンドで指導いただいた時期でした。

あるときは、渡辺先輩(S24)がグラウンドにいらっしゃり、開魂碑のとなりでいきなり真っ裸になって着替え始め、そこを通りかかった陸上部の女子が「キャー」と大騒ぎに。またOBの方々からよく差入れいただいていたのですが我々が練習で走り回り、喉もからからの時に蜂楽饅頭を大量に持ってきていただいたOBの方も。

夏になると大学生の先輩たちがグラウンドで指導くださるので、その頃は学芸大学から現顧問の岡本先生(S56)、渡辺先生(S57)、そして早稲田から森田先輩(S58)、渡辺先輩(S58)という錚々たる先輩たちが指導下さり、今思うと大学生もやらない夏の炎天下に、めちゃくちゃに走らされたことを記憶しています。その頃のチームは実力がなく、いつも2回戦くらいで負けてしまうレベルのチームでしたが、今思い返せば、熱心に通っていたOBの皆様には、感謝してもし尽くせない程お世話になりました。

【大学時代】

早稲田大学には二浪の末に入学しました。早稲田はそのころ160人を越える大所帯、その中でラグビー部寮に入れるのはレギュラークラスに限られていて、一般入試でしかも二浪もしている私など入れるはずもなかったのですが、その頃副主将を努めていた前田先輩の口利きもあり1年から入寮。大変恵まれた環境でラ

グビーをすることができました。大学では多くのラグビースキルを学びましたが、大学トップクラスの練習に耐え、最終学年で赤黒ジャージを着ることができたのも、修猷館で鍛えられた体力と精神力あってのことだと思います。

【社会人になって】

大学卒業後、大成建設に入社しました。内定者のパーティーの時その頃の役員に「君は修猷館ラグビー部出身か！高山(先輩)を知っているか？」と言われびっくり。この時初めて福岡市議を長く勤められた高山先輩と同じ道を歩んでいたことに気がきました。その役員は高山先輩の大成建設時代の先輩にあたる人で初の選挙の時にはタレントのタモリと一緒に選挙応援にも行ったそう。その頃の事を懐かしげに話されておりました。それ以来、その役員は企業の中の一兵卒である私に目をかけていただき、大変な励みとなりました。

【東京支部幹事として】

会社に入り転勤を繰り返していた私が2006年より東京勤務となり、その年の7月に開催された東京支部新人歓迎会およびOB懇親会に出席したのが本当に久しぶりの修猷館ラグビーとの再会でした。青山ダイヤモンドホールで開催されたこの年、宴もたけなわというその時に、それまで幹事を続けられてきた安川先輩(S44)から、「そろそろ次の幹事は若いものに任せたい」と発言があり、指名されたのが私にとって大学の先輩でもある松瀬先輩(S54)、そして私も松瀬先輩の指名により真砂先輩(S55)、加茂川先輩(S57)、徳島君(H10)らと共に幹事団を担うことになったのでした。

東京支部で把握しているOBは現在200名あまり。そのみなさんに懇親の場を提供することと、上京してくる新人OBを歓迎することを中心に活動をおこなっております。そんな中、08年の選抜大会出場という吉報が飛び込み、東京支部で大応援団を結成して熊谷まで遠征したことも良い思い出です。昨年は、都立高校と全国の名門公立高校のOBが集まり、試合と懇親会を通じて交流をおこなう10校ラグビーフェスティバルに修猷館として初参戦を果たしました。

次はぜひ東京での福高戦を実現させたいと目論んでおります。

【名古屋にて】

昨年5月より名古屋で単身赴任をしております。名古屋にはもともと縁もゆかりもなかったので、不安も多かったのですが、安川先輩に「名古屋にいったら訪ねたらよか」と紹介していただいた青木先輩(S33)、満生先輩(S45)から、さらに地元の方々を紹介いただき、早く名古屋に慣れることができました。

40を過ぎて振り返るに、修猷館ラグビーのご縁に本当に助けられている人生だと思います。これから少しでもご恩返しができますように、OBクラブの活動を支援してまいります。そして現役諸君の花園出場を心より祈念いたしております。

◇平成22年初顔会の開催

松尾 真典 (S52卒 事務局)

平成22年1月2日恒例の初顔会を開催いたしました。

当日は天候にも恵まれ、OBに加え現役・先生方・保護者の方々総勢100名以上の方が参加されました。

11時30分より全員集合し開会式。

まず、開魂碑に向かい物故者に対し黙祷を捧げた後、安部会長から年頭の挨拶、新キャプテン古城君より力強い決意の言葉の発表がありました。

また、今年は現役諸君がワールドユース予選会(1/2~5)に参加のため開会式は壮行会も兼ねており、終了後現役諸君はグローバルアリーナへ出発。

さて12時より岡本先生にレフリーを務めていただきOB戦の開始となりました。昨年より松尾事務局長の呼びかけで「over 40」OB戦の実現を計画しておりますが、残念ながら今年も人数揃わず若手OBとの混合での開催となりました。

毎年欠かさず参加の最年長の高山先輩(s33年卒)をはじめ皆様お疲れ様でした。(ちなみに、松尾事務局局長も残念ながら風邪のためゲームには参加できませんでした。

OB戦終了後、グローバルアリーナへ現役応援ツアーの出発。

多くのOB、保護者の方々の応援の中、初戦の四日市農芸戦は終了間際にキャプテン古城君の同点トライにより引き分けに持ち込み、「ファーストトライ勝利」のルールにより幸先よく新年初勝利となりました。（ワールドユース予選会の内容は修猷館ラグビーHPをご覧ください。）

その後、現役の勝利に「こいつあー春から縁起がいいわい！」と上機嫌で西新の黄鶴楼にて懇親会を開催。

最年長斎藤先輩（S30年卒）から最年少は仁部君はじめ5名のH19年卒OB。（その年の差50歳以上！）世代を超え修猷館ラグビーOBという共通項の中、和気あいあいと懇親を図ることができました。

来年の正月こそは花園で修猷館ラグビーの勝利を肴にOB懇親会ができることを祈りつつ…。

OBの皆様、本年もよろしくお願いいたします。

◆新チームの発足にあたって 現役 メッセージ

古城 智也（キャプテン）

私たちはワールドユースの予選や新人戦の中でレベルの高いチームと試合し、自分たちの実力がまだまだ足りていないことを痛感させられました。

試合の中で、特に課題となっていたディフェンスと接点、この二つをまず解決することが、より高いレベル、花園への第一歩、あるいは大幅な前進につながると考えています。

そのため、まず接点で負けないよう、体重と筋力を増やし、一人一人がどんな相手にも負けない強い体を目指しています。今、トレーナーの方や栄養士の方の援助もあり、少しずつその成果が出てきています。

ディフェンス面では、相手が嫌がるような激しく突き刺さるようなタックル、そしてその中でも一人だけ飛び出して穴を作ることをのぞく機能的な守備、この二つを徹底することで、相手に責めさせないようなチームができると考えています。

日々の練習で、一人一人が自分に何が足りないのか、どうすればそれを改善できるのかを常に考えることで、練習のレベルが上がり、チームのレベルも上がっていきそうすれば花園は確実なものになるはずです。そして自分たちが修猷館のグラウンドで練習できているのは、OBの方々による様々な面での多大な援助があってこそだという感謝の気持ちを忘れずに、これからも日々努力していきます。

吉永 樹（BKリーダー）

僕の目標は花園です。それしかありません。目標のために日々練習を積み重ねていますが、最近体作りを中心に練習をしています。Wユースでは体格に大きなハンデがあり負けたと思っているので、体さえ大きければ、うちのチームは花園を狙えるほどは必ずです。

僕の個人的な目標として、「倒れない」ことが今の目標です。新チームになってから立てていたもので、試合ではなかなか倒れない選手になっていっています。今、体作り期間でどの部員も力をつけているので、いずれどの選手も簡単に倒れないプレーヤーになります。自分も、エ

ースとしてさらに力強く、チームを引っ張っていきます。

またBK全体の目標として「BKで点をとる」という目標があります。昨年がBK主体のチームだったので今年も同じく、FWの足を引っ張らずBKで点をとっていくチームを作ります。今のBKは個人的能力がけっこう高いので、ディフェンスとコミュニケーションさえとればかなり強くなります。ひたむきな負けん気はどのチームよりもあるのでこれからの試合、大会その気持ちを常に持って挑んでいきます。応援よろしくお願ひします。

田中 誠人（FWリーダー）

ワールドユース予選、新人戦を通して、リーダーとしての仕事の大変さと自覚を持つことの大切さが分かった気がします。しかし、まだ盛り上げる声など出すことを古城や山下に任せすぎているので、そういうところを改善しなければならないと思いました。

プレー面でももっと自分が先頭に立ってオーバー、タックルできる能力を身につけるため日々筋トレなどに真剣に取り組み、花園予選までに筑紫、東の選手にも劣らないフィットネスを身につけ、花園に出場したいと思います。

チームとしては、発足した当初に比べると格段にチーム力が上がっていますが、まだ決定力に欠け、ここぞというときのミスなど詰めの甘さを感じることが多々あります。なのでこれからの練習試合などを通して、修正してつまらないミスをしないチームになります。

FWからチームを盛り上げ、サイドディフェンス、カバーディフェンスの徹底、そしてバックラインへの縦参加、オーバーのつきを早くして他チームから恐れられるくらいのFWを目指したいです。

これからの試合ではモールとても重要になってくるので、相手には点を取らせず、自分たちはそれが一つの得点パターンになるよう強化し、どのチームにも通用する強力なモールを組めるよう努力します。

いろいろな合宿、遠征ができるのもOBや保護者の方々のお力添えがあってのことだと思うので、このことを当り前と思わず、毎日感謝の気持ちを忘れず、必ず花園に出場したいです。

手嶋 文香（マネージャー）

三年生の先輩方が引退してもう四ヶ月近くたち、春からは、本当に最高学年になるんだなあと、毎日緊張しています。ついこの間、ラグビー部に入部したような気がしますが、いよいよ最後の一年がはじまります。

この代は、部員が13人と、稀に見る少なさですが少ないからこそ、よりいっそう強く団結できると思います。下川主将の代が引退して、ワールドユース予選、新人戦と経験してきましたが、はじめの方こそハラハラしましたが、チームがどんどん強くっていくのが、目に見えて分かりました。だから、これからも色んな経験を積むごとに、一步、一步、強くなっていくと信じています。

ラグビー部は、学校でも中心的存在で、色んなことに積極的に取りくむ、という印象が強くあります。先輩方が残してくれた、素晴らしい伝統をしっかり受け継いでいきたいですし、私も、「修猷館ラグビー部」の名に恥じない行動を常に意識していきたいです。部員が毎日、一生懸命練習している姿を、しっかり目に焼きつけたいです。

どんな時も笑顔で、どんな時も部員を信じ、先代のマネージャーの先輩から培われてきたマネージャー精神をしっかり受け継いで、よく気がつき、頼りあるマネージャーに成長していこうと思います。

どうか温かい目で見守っててください。

編集後記

発行/修猷館ラグビー部OBクラブ

中嶋館長先生とお話する機会がありました。そのとき館長先生は「修猷館創立230周年記念に人工芝グラウンドが完成するといひですね」と言われました。「そのころラグビー部も創部90周年です、…」修猷館ラグビーOBクラブの諸兄、大いに盛り上がりましょう。

先日、珍しくラグビーを題材にした“インビクタス”という映画（ローハイドのクリントイーストウッド監督）を観てきました。ワールドカップラグビー南アフリカ大会をモチーフにしたものですが、その大会の試合をほとんど観たのを思い出しました。映画ではオールブラックスのロマーが日本人みたいな顔をしてました。

その中の試合で一つ印象に残るシーンがありました。N08のサイドアタックをスクラムハーフがタックルいっばつ仰向けにスクラムの後方までひっくり返してしとめたのを思い出します。トライをとるのは難しくてもとらせないことはこんなタックルでできるということです。現役諸君にはどんどんタックルを磨いてほしいもんです。

事務局

松尾 邦雄（S46卒）

〒811-1347

福岡市南区野目5-10-45

TEL:092-541-5503

FAX:092-551-7290

携帯090-3012-0903

E-mail:mactaiho@san.bbq.jp